

コラム  
「きのうきょう」

# 就活生の日

学生記者 田中未来（文学部4年）

先日、社会人の方とお話をする機会があった。「就活か、いいな、もう一度やりたいな」。懐かしそうに笑うその人をみて、この人うそつきだなと思った。

そんなわけがない。毎日毎日、同じ服を着て同じ顔した人達と同じように企業説明会へ行き、自分って本当にこういうことがやりたいのかなと首をひねって帰ってくる。その繰り返し。この人、うそをついていなかったら、ものすごく忘れっぽいのかもかもしれない。就職活動があまり愉快的記憶ではなかったから、忘れてしまったのだろう。うん、きっとそうだ。

きょうもいつものお買い得スーツを着て家を出る。少しよれてきたが気にしない。「いってらっしゃい」という母の顔が最近いつも心配そうだ。大丈夫だって。心の中でそう呟きながら、バス停までの道のりを歩く。「だって、君が自分の人生を決められるの、今なんだよ」。あの社会人の方は、そんなことを言っていた。

しかし、「人生を決める」と「今」が結びつかなくて、焦る。まだ今じゃないんじゃないかなあ。

往生際が悪いとはまさにこのことだが、それでも認めたくない。こんなに殺伐と過ごしている今はずがない、と。哀れな就活生とは私のことだろう。

説明会会場に着くと、前の席に座る女子2人組が「自己分析したー？」と屈託なくお喋りしていた。私は自己分析というものをしたことがない。その理由を、「まだ何者にもなりたくないから」と答えると、友人に「お前は面倒くさいやつだな」と他己分析された。

気づいたら深い眠りについていて、隣の席に座る、日に焼けた青年がげげんそうな顔で私を見ている。もし、この人の第一志望がこの企業で、きょうの説明会もとても楽しみにして来ていたとしたら、隣のやつが興味なさそうに寝息を立てていたら、やはり不快だろうか。それとも、「この人は落ちるな」と確信して鼻で笑うだろうか。どちらにせよ途端に居づらくなって、終わるまでひたすら時間が早く過ぎることを祈っていた。

ものすごく気疲れをして家に帰ってくると、母が何か言いたげに私を見つめたが、結局「おかえり～」とだけ言って台所へと消えていった。きょうのご飯は果たして何だろう。

タマネギカツレツという珍妙とも言える料理を食べながら、パソコンでメールチェックをしていると、何となくエントリーシートを送った企業から1次審査通過の連絡が来ていた。「やった!!」。自分でもびっくりするほど無邪気な声が出ていた。

「なに、何事なの？」母が目丸くして駆け寄ってくる。「いや、なんか、一次審査通過の連絡来たー。まあ、それだけなんだけど」

急に気恥ずかしくなって、努めて冷静を装って返答すると、母は分かりやすく喜んだ。「きょうはカツ丼にすればよかった」と少し涙目だ。カツ丼は私の大好物である。

「1次審査通過しただけなのに、そんなに喜んじゃってさ」。そう言いながら、私は明らかに浮かれていた。頑張っって顔を引き締めてもふわっと自然に口元が緩んでしまうくらいに。

それでもひねくれた私は、あの親切な社会人の方の言葉を完璧に信じることはできないけれど、でも、分かる気がする。無限に広がる自分の可能性を、自分勝手に想像出来るのは今だけなのだ。そうか、こういうことか。

妙に納得した私は、心の中であの人をうそつき呼ばわりしてしまったことを深く反省しながら眠りについた。夢の中で、素敵なオフィスレディーになった自分と会えることを期待しながら。

この文章を私の友人が読んだら、「お前は単純なやつだ」と「他己分析」してくれるに違いない。

